Interview
SPACE ON WHEELS

インテリアカスタムの参考になる 簡単かつカッコよく仕立てる方法

トレーラーハウスやキャンピングカーは、狭い空間に効率的に家具や家電が配置してあるのが魅力だ。とは言え、少し旧いキャンパーが採用する花柄やコテコテのバタ臭い内装にちょっと抵抗がある人も多いことだろう。ここで紹介するオーナーは、キャンパーが持つ基本的な配置を生かしつつ、インテリアを簡単な改装で自分流に仕立て変えた好例。そんなトレーラーハウスにも活かせるリノベ方法をお聞きした。

Owner
荒川浩司さん

店舗等の内外装を手掛ける会社、エー・ディーアンドシー代表。リフォームや家具製作は専門分野なので、自分のキャンパーも仕事で培ったスキルを生かして仕上げた。このキャンパーで夏は海、冬は雪山にダイレクトにアクセスすることで趣味を満喫中。

トレーラーハウスもキャンピングカーも、移動可能な部屋〟という意味では同類。したがって基本的なインテリアデザインの方向性も似ている。しかし若干異なるのは、あくまでも定置使用がメインのトレーラーハウスとは違って、キャンピングカーは移動中にも快適に過ごせるようになっていることだ。

ここで紹介するキャンピングカーは、キャンピングカーの機能面を犠牲にせず、部屋を模様替えするような感覚でオーナーの手によって内装のリフォームを受けた個体だ。オーナーの荒川さんは、店舗内装などを手掛ける会社の代表で、リフォームという作業はそもそも専門分野。そこでホビーの為に購入したキャンピングカーを、自分好みにコツコツとリフォームしていくことにした。

「キャンピングカーやトレーラーハウスの内装って、やはりオリジナルのままだとどこか昔のスナックぽいんですよね(笑)。モケット地のソファとか、ちょっとフカフカしたカーペットなんかを使っていて。そこでもっと今風に綺麗な内装にしたいと思ったんですよ。自分がいる空間として、違和感のない場所にしたかったんです」。

荒川さんがキャンピングカーを所有するのはこれが初めてでは無く、このBCヴァーノンが3台目。過去にアストロやダッジバンベースの物を所有したが、取り回しの面では良くてもキャンパーとしてのサイズには不満があり、サイズ的にクラスアップしたこれを入手した。

とはいえこのBCヴァーノン、製造はカナダのコーチビルダーが行っているが、その企画はじつは日本で行ったもの。日本で取り回し易いサイズ感、湿気の多い気候に対応できる耐久性等を最初から考慮して作られており、ある意味本場が作った日本仕様といえるモデルなのだ。

だがそうしたサイズ感や機能面は日本の風土に合うように仕上げられているが、内装に使われるマテリアルやそのセンスは良くも悪くも本場のまま。キャンピングカーやトレーラーの内装はクルーザー船などとも共通するのだが、〝ちょっと豪華〟に仕立てられることが多い。このセンスこそが荒川さんの言う〝スナックっぽさ〟の正体であり、今回のリフォーム対象ともなったわけだ。

まず目を引くのが、カーペット敷きから全交換されたフローリングのフロア。色味も明るいので室内の印象がこれでガラリと変わったが、板張りにすると正直重量も気になるところだ。

「この床は、実は板張り風に見せる樹脂製のフローリング部材を使っています。塩ビ製でとても薄いので軽いですし、カッターで切れるので加工もしやすいんですよ」。

こうしたマテリアルのチョイスは

90年代キャンパーの室内はこんなバタ臭さ！

これはB.C.ヴァーノンの物では無いが、一般的に良くあるアメリカンRVの内装イメージ。これはこれでバタ臭い良さもあるが、現代のインテリア事情からしたらけっしてカッコ良いものではない。この過剰な装飾は、確かにスナックの内装と通ずる物がある。

明るい色調でアレンジされた室内　B.C.ヴァーノンのラインアップの中で19フィートサイズは短い方だが、室内は充分な広さがある。これは運転席上の寝台から見たカットで、最後部にキッチン、その左手がシャワー＆トイレ、右が冷蔵庫というレイアウト。断熱に優れた設計で、真冬でも日が差せば室内はポカポカと暖かい。

Trailer
ベースとなったキャンパーはコチラ

日本で企画され、カナダで作られたB.C.ヴァーノン。1996年式フォードE350がベースで、日本でも乗りやすい19フィートサイズとなっている。エンジンは7.5リッターのV8を搭載。エアコン、キッチン、バスルーム装備の本格派モデルだ。

Text/Takayoshi SUZUKI　Photo/Ken TAKAYANAGI　Specialthanks/トカイナカビレッジ　tokainaka.farm

さすが本職。壁や戸棚はペンキで直接ペイントし、床同様に明るい雰囲気にチェンジ。これだけでもだいぶイメージが変わったが、荒川さんの本職ならではの技は、ソファベッドにも生かされている。

「ソファがそれこそスナックみたいなヤツだったんですが、メインの大きなソファベッドは全部作り直しました。これは専門の業者にお願いしましたが、寸法を測って新たに作り替えて、ファブリックも明るい物に替えました」。

ソファをゼロから作るのは普通の人にはなかなかハードルが高いが、荒川さんはソファの位置変更、ソファベッドへのアレンジ方法等のアイディアを自分で考え、オリジナルに囚われない新たなインテリアを完成させた。そしてここがまさにトレーラーハウスのリフォームとは異なる部分で、キャンピングカーは〝移動時〟と〝停車時〟の両方を考えてインテリアをリフォームしなくてはならないのだが、荒川さんは本職のスキルを生かして見事にそこをクリアしている。

「最大で大人3名、子供も含めて合計5名は乗れますね。家族でこれで移動して、海のそばで一泊すると子供は喜びますよ。朝起きたら目の前に海があるわけですから(笑)」。

荒川さんはサーフィンもスノーアクティビティも両方楽しむので、その際のベースとしてこのキャンパーは海へ山へと大活躍。室内にはウェアを干す為のバーを追加したりと、ホビーに特化したアレンジも加えている。

居心地の良さを追求して内装各部をアレンジ

虚飾を廃してシンプルを追求

キャンピングカーはどうしても豪華路線のインテリアになりがちなので、荒川さんは本職のセンスを生かして各部をシンプルにアレンジ。ナチュラルウッドの戸棚は白くペイントし、壁も直接ペンキでブルーに塗った。床材は軽量な塩ビ製フローリング部材で、色も明るめをチョイス。カーテンも大げさではないナチュラルな物を装着した。

ソファ&テーブルもリフォーム済み

元はモケット地で〝スナック風〟だったソファは、ファブリックを張り替えて座面の方向もアレンジ。テーブルとソファ台座のウッド感も統一し、スナック感皆無のナチュラルなインテリアとして仕上がった。この対面式のソファは、就寝時ベッドへとチェンジする。

限られた空間を有効活用

左右のソファはどちらもベッドへとアレンジ可能。大型の方のソファは一から荒川さんが設計したワンオフ品というのがスゴイ。ソファ座面の下は収納を兼ねており、限られた空間を効率的に使えるように考えられている。ここまでやるのが大変な場合は、ファブリックを張り替えるだけでもガラリとイメージが変わるはずだ。

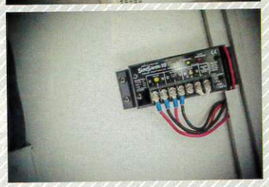
運転席上の寝台スペースは天井が低いが、大人が横になって足を伸ばせるスペースがある。下のソファベッドと合わせれば、大人3名がノンストレスで楽々と就寝可能だ。

〝暮らす〟為の装備も充実

内装リフォームにかかった期間は1年程。日常的にこのキャンピングカーを使いながらコツコツと行っていったのでそれだけ時間が掛かったが、それは焦らずにじっくりと、自分の使いやすいように、居心地がいいようにアレンジしていったという事でもある。

荒川さんにとっては、このBCヴァーノンに乗ること、所有することは目的ではない。このキャンピングカーに乗って何をするか、どこに行くかが大事なのだ。つまりこの全長19フィートのキャンピングカーは、サーフボードやスキー板の様な遊び道具の延長であり、だからこそ自分好みにカスタムしたくなるのだとも言える。

キャビン最奥にはキッチンスペースがある。シンク、ガスコンロ、電子レンジ、冷蔵庫を装備しているので、何不自由なく家と変わらない食事を提供できる。キッチンはまだ手を加えていないノーマル状態だ。



本場製キャンパーならではの装備

車体には停車時に電源を供給する発電機、LPガス、最大240リットルの水タンク等を装備。収納スペースも各部に設けられており、かなりの長物も車体収納部に格納できるそうだ。外で使えるシャワーもあるので、サーフィンに行った時など海遊びの時に大活躍。車内には大型のエアコンもあるので、一年を通じてどんな場所にも出向くことが可能だ。